

# 文化

日本人会主催試写会レビュー  
コーシャ・フェレンツ脚本・監督

## 「いま一人の人」

(A masik ember)

盛田 常夫

1987年に制作されたこの作品は1956年問題を題材としているために、1989年の体制変革まで上映が許可されなかった。ハンガリーでは共和国への移行が宣言された89年10月に2日間にわたってテレビ放映され、大きな反響を呼んだ問題作。日本では1991年に初演、「東欧映画祭」の参加作品。

題名のA masik ember は哲学でいう「他者」を意味する。実存哲学の即自と対自の関係、つまり自分と向き合う他者を意味する。フィルムを通して追及されるテーマはもう少し普遍的な意味合いを持っているが、自分を写しだ

す鏡のような存在としての他者をテーマにしたものである。

ストーリーはポイタール・アンタル親子2代の生様を、2部構成でまとめたもの。第一部はナチスと組んだハンガリー軍が対ソ戦線から敗走する1944年、小隊のポイタール・アンタルと、ポイタールによって危うく命を救われた同僚のトルダ・ヨージェフが主役である。2人とも、エルディイ出身の学校教師の役柄。敗走の途中、ソ連のパルチザンの襲撃を受けるが、生きながらえた2人を待っていたのは、敵前逃亡者にたいする軍事裁判。処刑されるところが、ハンガリー人のナチス将校レーティ将校に見込まれ、2人は処刑を免れる。

処刑者がもがき苦しむ深い穴に向かって無慈悲に発砲するレーティを、アンタルは咄嗟に突き落とし、ヨージェフとともに逃亡を図るが、小心者の彼は逃げることを拒否し、その場に居残る。

舞台は変わってプスタの農家。妻ユ

リア、一人息子のアンタル（アンテイ）、妻の父親マルトンが家を守っている。すでに憲兵隊が家探しを始めているが、誇り高いマルトンは憲兵に逆らい、逆に両手両足を縛られ、馬に引かれて連れ去られる。

闇に紛れてようやく家にたどり着いたアンタルは、犬小屋に身を隠す。翌日、ナチス将校レーティに恩を売ったヨージェフは、彼の手先となってアンタルを誘い出そうとする。アンタルの帰宅を否定する妻に、「レーティは生きています。早く逃亡しろ」との伝言と、弾倉を外した銃を置いて去る。銃を受け取ったことはアンタルの存在を伝えたのと同じ。アンタルは再度の別れを惜しむ暇もなく、森に向かって出発するが、そこにはレーティの部隊が待ち伏せしている。アンタル逮捕と引き換えに自由の身を保証されたヨージェフは、アンタルに逃げろと叫ぶが、逆にヨージェフはナチス隊長に銃殺される。アンタルは拘束され、連れ去られる。

アントルが去った家に、拷問を受けたマルトンが馬車で戻ってくる。ひどく威嚇を傷つけられたマルトンは馬小屋で休み、村の結婚式帰りの楽隊が心を癒す歌を奏でる。「鳥籠から小鳥が逃げたよ。春になったら、戻ってくるさ。春に帰って来なかったら、夏には戻るだろう。夏に来なかったら、秋に戻らう。それでも戻って来なかったら、もう帰って来ない」。このうら悲しい詞を、ハンガリーの民謡歌手セベスチャン・マルタが歌う。

主人公のポイタール・アントルは武器を持たずに森へ向かった。なぜなら、武器を手にする者は、それを使うと使わざるとにかかわらず、潜在的な殺人者になると同時に、武器の犠牲者にもなるというのが、彼の信念だからである。しかし、結局は武器を持たない者も、武器の犠牲者になるという現実を否定することはできない。アントル自身も再び家に戻ることはなかった。命の恩人をナチスに売り、力に頼って

自らの自由を得ようとしたヨーゼフもまた、命を落とした。逃亡者には安全なはずの森は、民としても利用される。理想主義者にも現実主義者にも人間世界は容赦ないことを教えている。それでも、人々は理想主義と現実主義の狭間の中で、生きていかねばならない。理想も現実も、一人の中で同等な位置を占める。アントルもヨーゼフも、同じ人間の二つの側面に他ならない。

ポイタール・アントルが連れ去られて12年。時まさに1956年10月。ハンガリー動乱の真っ只中、学生の追悼・決起集会の場面から、第二部が始まる。学生リーダーのフランツ・イシュトヴァン（ピシュタ）は政府との交渉代表委員に、アントルの息子アンティを指名する。

アンティは自らは代表にふさわしくないと前置きした後、父親の信念に従い武器を持つと闘争に疑念を挟む。また、学生たちがラーコシ体制と社会主義体制を混同していることにも異論を唱え、「資本による権力でも、国家による権力でもなく、公正な権力が樹立されること、社会主義は真の民主主義に裏打ちされて初めて樹立される」と訴えるが、参加学生からブライングを受け、会場を去る。

ブダペスト市内は次第に騒乱の状況が極まり、銃弾が相互に飛び交う状態になる。看護婦・医師として活動しているアンティの恋人の医学生ジュジャ



は、アンティを探しに拘置所襲撃の現場にたどり着くが、アンティを見つけたその瞬間に銃撃を受け、病院で果てる。

アンティはジュジャが銃撃を受けた現場周辺を探し、だれが何を目的で引き金を引いたのか知ろうとする。教会の屋根裏部屋に辿り着いた途端、身を隠していた公安警察官に銃で威嚇され、衣服を交換させられて、自ら公安警察官の制服をまもって彼の自宅までの道のりを同行することになる。途中、公安警察側の車から銃撃を受け、アンティではなく、私服になっていた警察官が狙撃される。アンティは彼を担いで近くの住宅に飛び込むが、警察官は息を絶える。彼の遺言通りに、彼の母親に連絡しようとするが、公安警察官の制服は住民の憎しみの対象であり、アンティは銃を持った住民たちに追いかけられ、大学の寮に逃げ戻る。

場面は転換し、アンティの実家。夫を失ったユーリアは、騒乱のニュース

を聞き、首都にいる一人息子の安否を気遣う。祖父マルトンが孫を説得にブダベストに出かけることになり、食料のほかにも、一刻も早く家に戻ってくるようにと記したユーリアの手紙を携える。出発にあたり、村の集会所にはマルトンの他、もう一人の祖父（ポイタルの父親）や村の有力者が集まり、マルトンのブダベスト出発を見送る。

ブダベストは市街戦に突入しており、いたるところに夥しい死体が横たわる。私刑の絞首刑を受けた公安警察官が引きずられ、小さな子供の亡骸を抱えながら亡き崩れる光景が写し込まれる。ようやく大学の寮に辿り着いたマルトンは、食料と手紙を渡し、一緒に田舎へ帰ろうと諭すが、アンティは今度は帰れないと答える。そのうち方が付いたら田舎に戻る、と母への伝言を伝える。

アンティは学生リーダーのピシュタたちと一緒に、再びジュジャが銃撃された周辺へ出掛ける。どこからともな

く銃撃があり、1人2人と銃弾に倒れピシュタもまた命を落とす。武器を持たないアンティは銃弾が発射された方向へと林間を歩み、正体を確かめようとするが、その瞬間、狙撃される。

ここでも、武器を持つ者も、持たない者も、同様に命を落としてしまう。武器を取らないことが理想主義と知りつつ、父の教えをあくまで守ろうとするアンティ。現実主義の中に身を埋没させ、銃撃戦のなかで死んで行く友人たち。住民の指弾をかい潜って帰宅を急いだ若い公安警察官。人は外見や服装で善悪を判断するが、若い警察官にも同じ生活があり、家族がある。アンティと同様に、家には愛しい息子を持つ母がいる。

緑豊かで、自然に恵まれた地球上で同じ人間同志がどうして戦害を繰り返していかなければならないのか。勝者は勝ち誇り、敗者は打ちのめされる。そして、互いに立場を変えながら、この野蛮な闘いが数千年にわたって続け

られる。僕と君は同じ人間ではないか。僕は君、君は僕だ。アンティの素朴だが、しかし真実の信念は、21世紀が近づく現在なお、人類に課せられた課題だ。

祖父のマルトンはアンティの亡骸を抱えて村に戻るが、まず老ポイタールに相談する。事の真実をアンティの母ユーリアに知らせるべきか、それとも暫くの間、秘密にしておこうか、と。

老ポイタールは真実を知らせ、厳しい現実と向かいあいながら生きる以外にないではないかというが、マルトンはあまりに厳しい現実が少し和らぐまで暫くは嘘を通したいという。2人は墓地に向かい、アンティを葬ってやる。

ユーリアはマルトンに尋ねる。息子は何時戻ってくるといったのか、どうしてすぐに帰れないのか、そうね、一段落するまでは無理よね、何から先に頑張ったのかしら、手紙の返事は書いてくれたのかしら、と。マルトンは生

返事を繰り返しながら、馬が疲れているから傍で休んでやると、寝具を馬小屋に運ぶ。ユーリアはそれを見て事の成り行きに気付き、力を失って行く。

映画はここで終わるが、夫と一人息子を失うという重みに、皆、言葉少なに試写会を後にした。僕と君、同じ人間の二つの顔が、果てしない憎しみの関係になる。人間がこの愚かさを克服するまで、いったいどれほどの時間が必要なのだろうか、理想主義は勝利していくのだろうか。

注記：本フィルムのテレビ・ビデオ版があります。貸出し希望の方は編集室まで連絡下さい。

